

## 五輪九字明秘密釈における往生について

本 多 隆 仁

はじめに

興教大師覺鑊（一〇九五—一一四三）の業績は、伝法会の復興、事相の振興、金剛峯寺座主職の独立、密教と念仏の融合などがあげられている。<sup>①</sup> 本稿では、興教大師の業績の中、「密教と念仏の融合」にかかわるかと思う、『五輪九字明秘密釈』（以下『五輪九字秘釈』）における往生について考察していきたい。

往生が浄土教と密接に関連しているのは周知の如くである。この場合の浄土教とは、阿弥陀如来を信仰し、口に念仏を唱え、来世には極楽浄土に往生することを願う教えである。興教大師在世の当時は、浄土が広まってきている時期とされる。<sup>②</sup>

興教大師以前には、空也（九〇三—九七二）、源信（九四二—一〇一七）がいる。空也は念仏を普及させ、源信は『往生要集』を撰述した。また往生した人々をあげた『日本往生極楽記』の撰者、慶滋保胤（一〇〇二）もいた。

興教大師には多くの著作がある。なかでも『五輪九字秘釈』『阿弥陀秘釈』『一期大要秘密集』<sup>③</sup>が浄土教との関連を探るのに重要な著作であろう。特に『五輪九字秘釈』<sup>④</sup>は興教大師の代表的な著作であり、興教大師の思想を知るため

にも重要なものである。さらには興教大師が往生をどう理解していたかを知るのに、本書は最もよくまとまっている著作であると考えられる。また本書は大日即弥陀、密厳浄土即極楽浄土を説き、密淨融合思想が述べられるといわれる。<sup>(5)</sup>そこで本稿では次の二点を問題とする。

①真言教理と往生

②都率往生と『五輪九字秘釈』

興教大師は弘法大師の真言密教の再興者であったといわれる程である。<sup>(6)</sup>その興教大師は往生をどのように捉えているのか、この点に注目したい。『五輪九字秘釈』では当然のことながら、大日即弥陀あるいは密厳即極楽の如く、往生も真言教理に立脚して説かれることが予想される。そして往生と真言教理との関係は、『五輪九字秘釈』の「序文」にその基本線が表現されていると考えた。そこでまず「序文」の内容を検討し（第一節）、興教大師の往生を探る手掛りにしたい。そして本書に説かれる二種の往生、すなわち現身往生と順次往生の意味を検討する（第二項）。これは①の問題点を明確にするためである。

②は往生には都率往生もあるという視点からの問題点である。大日即弥陀、密厳浄土即極楽浄土、そのように説くのが『五輪九字秘釈』であると解説されるが、都率往生（弥勒浄土）は本書とどのような関連があるのかを考察する<sup>(7)</sup>（第三項）。その都率往生は『五輪九字秘釈』の中では数箇所しかみあたらない。都率往生は本書の中心には置かれていない。一方、真言宗にとって都率往生は重要な事柄である。その点を前項を補なう意味で言及する（第四項）。

一 往生解釈の基本的立場（『五輪九字秘釈』「序文」の内容）

『五輪九字秘釈』の「序文」とは本書の初めの「竊惟二七曼荼羅者大日如来之内証弥陀世尊之肝心……（中略）……

重述秘釈意只在此往生難易有執使然而已」を指す<sup>(8)</sup>。この序文は本書の基本的な立場と撰述の意図を表明している。この序文の後に本書は十門<sup>(9)</sup>にわけ論を進めている。

『五輪九字秘釈』は興教大師の晩年の著作であり、心血を注いで撰述されたものといわれている<sup>(10)</sup>。本書の題の「五輪」とは「地水火風空」のことで「*ガクミク*」の真言を、「九字」とは「*ウミヨイイなるミタ*」の真言を示している。五輪は大日如来、九字は阿弥陀如来の真言のことである。本書の題からみれば、本書は大日如来と阿弥陀如来のそれぞれの真言を解釈（秘密釈）することがその内容になると考えられる。また本書の別名を『頓悟往生秘観』ともいう。

本書の序文では大日如来と阿弥陀如来との関係を総括的に述べている。このことからまず検討してみる。序文の最初では大日如来と阿弥陀如とを対比して

竊に惟れば二七の曼荼羅は大日帝王の内証、弥陀世尊の肝心、現生大覚の普門、順次往生の一道なり

という。二七の曼荼羅とは大日如来の五字の真言と阿弥陀如来の九字の真言のことである。まず最初に大日如来と阿弥陀如来とをあげ、大日如来は「現生大覚の普門」、阿弥陀如来は「順次往生の一道」と説明している。「現生大覚」と「順次往生」、「普門」と「一道」、これらが大日如来と阿弥陀如来の相違ということになろう。ここは真言教主としての大日、極楽往生を説く浄土教主としての弥陀と考えられる。「順次往生」は次項で述べるつもりである。が、ここでその意味を考えれば、それは極楽浄土に往生を願う教えである浄土教の往生のことであろう。というのは、さらに序文では弥陀に関連して「弥陀善逝の浄土は往生を称名に期す」というからである。

序文の初めは秘密釈ではまだ解釈していない。この後に大日如来と阿弥陀如来との関係を秘密釈で説いてくる。すなわち

頭教には積尊の外に弥陀あり、密教には大日即ち弥陀、極楽の教主なり。まさに知るべし。十方浄土は皆これ一仏の化土、一切如来は悉くこれ大日なり。毘盧、弥陀は同体の異名、極楽、密厳は名異にして一処なり。妙觀察智、神力加持をもって、大日の体の上に弥陀の相を現す。およそ是の如くの觀を得れば、上、諸仏菩薩聖を尽し、下、世天龍鬼八部に至るまで大日の体にあらざることなし

という。頭教では釈迦如来と阿弥陀如来とが別に立てられているけれども、密教では大日如来即阿弥陀如来であるという、その根拠に「十方浄土は皆これ一仏の化土」「一切如来は悉く大日」をあげている。このことは十方の浄土は本来的には大日如来が教主であることを意味している。したがって大日如来は阿弥陀如来とは同体であり、大日如来の住処である密厳浄土、阿弥陀如来の住処である極楽浄土、この両浄土は同一であるという。この解釈すなわち秘密釈は、十方浄土を包摂する曼荼羅思想から述べたものと考えられる。その秘密釈の意をさらに序文では「上、諸仏菩薩賢聖を尽し、下、世天龍鬼八部に至るまで、大日如来の体にあらざることなし」という。これは弘法大師の『十住心論』の「深秘釈」<sup>(1)</sup>を基本に置いているといえよう。つまり曼荼羅思想なる秘密釈とは弘法大師の深秘釈と同じ意味を持つと考えてよいと思う。

序文での秘密釈の主旨は、十方浄土を包摂する曼荼羅思想から大日と弥陀を論じることにある。この立場が『五輪九字秘釈』の内容の基本にある。この「秘密釈」によって興教大師は「大日即弥陀」「密厳即極楽」とした。このことから見れば、序文の最初の「現生大覚」と「順次往生」、「普門」と「一道」の対比は「浅略釈」である。

さて序文の最後には次の如くに説かれている。すなわち

既に知んぬ。二仏平等なり。豈に終に賢聖差別あらんや。安養、都率は同仏の遊処、密厳、華藏は一心の蓮台なり。惜しいかな、古賢、難易を兩土に諍うことを。悦しいかな、今愚、往生を当処に得ることを。重ねて秘釈を

述べる意、只だここにあり。往生の難易は有執の然らしむるなり

という。ここで問題となるのは都率という用語である。これ以前の序文は大日如来と阿弥陀如来との関連で述べてきた。ここに至って都率の用語がでてくる。都率とは欲界の六天のうちの第四天を指すだけであるが、もう一つの見方は弥勒菩薩の住処として知られている。ここでの都率は弥勒菩薩の住処のことである。また安養とは極楽と同様に阿弥陀如来の住処である。「安養、都率は同仏の遊処」とは、安養浄土、都率浄土、この両浄土はどちらも大日如来の遊処であることを示している。そしてこのことは都率往生、極楽往生、この二種の往生のことも同時に意味を含ませていたと考えられる。

曼荼羅思想という「秘密積」の場合、曼荼羅の諸仏諸菩薩諸天のあらゆる住処は浄土ということになり、またそれらの浄土は大日如来の遊処である。したがって曼荼羅に十方のあらゆる浄土が含まれる。同時に十方のあらゆる往生の浄土も曼荼羅に含まれることになる。十方のあらゆる浄土の中の一浄土が極楽浄土であり、都率浄土である。

この序文になぜ都率があげられているのであろうか。ただ都率は浄土の一例としてあげたものではないと考える。というのは都率は弘法大師の往生の浄土<sup>12)</sup>であるからである。そのことを思えば、弘法大師の都率往生に関連したことも『五輪九字秘積』は何かを語っていると考えられる。この点については別項で考察する。

さて序文の内容にもどろう。都率、安養の二つの浄土が述べた後に「惜しいかな、古賢、難易を両土に諍うことを」という。この中の「両」は別本<sup>13)</sup>では「西」とある。本稿では「両」を採った。「西」で意味が通じるであろうが、<sup>14)</sup>「両」を採ったのは「都率、安養の両浄土への往生の難易を諍う」とする方が理解しやすいからである。さらには都率往生と極楽(安養)往生の難易を問題にしている記述もあるからである。<sup>15)</sup>

また興教大師は「悦しいかな、往生を当処に得ることを」と言う。この当処とは現世をも意味していると考えられ

る。つまり興教大師にとっては「現世において往生すること」、それが「悦しいかな」ということになる。このことは『五輪九字秘釈』の別名である『頓悟往生秘観』の題名に表現されている。「現世において往生すること」もまた「秘密釈」ということになる。興教大師の往生を現世で得るといふ主張は大変興味深い。そしてこのことも興教大師が本書で述べる内容の主要な一つであったと考えられる。また「現世において往生すること」は次項で述べる現身往生ということになる。

## 二 現身往生と順次往生

『五輪九字秘釈』では現身往生と順次往生の二種の往生が説かれている。すでに序文に二種の往生がみられる。ここではまず往生の意味を求め、そして序文の後に説かれる現身往生と順次往生との二種の往生を序文の所説と関連して考察する。

往生とは、今日では多くの場合、「この世で命終して、阿弥陀如来の極楽浄土に生まれること」<sup>(16)</sup>という意味で用いられる。今日では浄土といえは阿弥陀如来の極楽を意味するので、往生する浄土を阿弥陀如来の極楽だけに限ることになったと思う。往生には阿弥陀如来の極楽への往生のほかに、弥勒菩薩の都率天への往生、観音菩薩の補陀落への往生があり、とくに極楽往生と都率往生は往生思想の代表的なものであった。<sup>(17)</sup>極楽往生は『無量寿経』などの浄土系經典をはじめ『法華経』などにもみられる。一方、都率往生は『弥勒上生経』などにみられる。往生の所依の經典はともかく、基本的には十方にそれぞれ浄土があるとすれば、十方それぞれの往生があると考えられる。

さて一般的な往生の理解では死を必ず経験する。これを興教大師はどのように捉えていたのであろうか。本書の序文にすでに往生という用語がある。この順次往生は一般的な往生、すなわち死を必ず経験しなければならない往生に

あたると考えられる。順次往生の順次とは「この生涯の次の生涯」<sup>(18)</sup>を意味する。順次には死を必ず経験しなければならぬ意味が含まれている。

『五輪九字秘釈』では順次往生に対して現身往生を説く。現身往生とは何を意味するのであろうか。本書の中、機根を示して

此の所化の機において総じて二種あり。一には現身往生、二には順次往生なり。現身門においてまた二門あり。

一には大機の即身成仏、二には小機の即身成仏なり。また二においておのおの二あり。利鈍、別なるが故に<sup>(19)</sup>という。真言行者の機根は現身往生と順次往生の二種であるという。そして現身往生を大機の利根、大機の鈍根、小機の利根、小機の鈍根の四種にわけている。ここでわかるのは、現身往生を四種にわけるときに現身往生を即身成仏と言い換えていることである。すなわち現身往生を即身成仏としている。現身往生と即身成仏を同じ意味にするとはどういうことであろうか。往生とは命終の後に浄土に生まれることである。その浄土は成仏するための修行道場である。この意味では往生と成仏とは相違する。しかし興教大師は現身往生という用語によって往生の持つ「命終の後」という意味を消して、現在の生において浄土に往くことを示したと考えられる。そのことが序文の「悦しいかな、今愚、往生を当処に得ることを」ということであろう。

さらに序文との関係で現身往生と順次往生について述べれば、序文では真言教主大日如来は「現生大覚の普門」、浄土教の阿弥陀如来は「順次往生の一道」とある。「現生大覚」と「順次往生」は対比されている。その「現生大覚」が即身成仏Ⅱ現身往生となると考えられる。

「秘密積」によれば、順次往生の浄土は結局、大日如来の密厳浄土である。この視点から現身往生と順次往生を述べている所がある。すなわち「発起問答決疑門」の中に

問う。五輪門に依る機に幾くの種がある。答う。二種の機あり。一には上根上智、即身成仏を期す。二には但信行浅、順次往生を期す。此の行者について多くあり。正しくは密嚴に往生し、兼ねては十方浄土を期するあり<sup>(20)</sup>とある。五輪門とは序文でいう現生大覚の普門のことであり、大日如来の法門のことである。この法門に上根上智、但信行浅の二種の機根をあげている。上根上智の行者は即身成仏すなわち現身往生し、但信行浅の行者は順次往生する。順次往生は正しくは密嚴浄土に往生するが、十方の浄土に往生することも兼ねている。この順次往生の浄土が本来的には密嚴浄土であることは「秘密釈」の理解である。そして同時に順次往生の浄土は、具体的に方向を示す十方浄土の一つでもある。

大日如来の法門の機根に順次往生の行者を含ませている。これはどういうことであろうか。この機根の行者は但信行浅である。それは大日如来をひたすら信じるが、行が備わらない行者を指す。また但信行浅の行者は来世には十方の浄土どこでも往生することが可能であろう。順次往生を願う機根の行者も真言行者の中にいたと考えられる。その順次往生の真言行者を興教大師は真言の機根と認めていた。それはなぜであろうか。順次往生を願う真言行者、すなわち極楽往生を願う真言行者、あるいは都率往生を願う真言行者が、興教大師の在世の頃にはみうけられるようになっていたからではなからうか。そのような意味で都率往生も『五輪九字秘釈』成立のためには重要な理由の一つであったと考えられる。

### 三 都率往生と『五輪九字秘釈』

都率往生は極楽往生とともに往生の一つである。『五輪九字秘釈』の中に都率あるいは弥勒の用語は数箇所しか見えない。『五輪九字秘釈』の中心となる内容は大日如来と阿弥陀如来である。そのことは書名で理解できる。ただ、



本書は大日即弥陀、密厳即極楽を述べ、興教大師の弥陀信仰を表明している著作であることだけで済ませてよいのであろうか。本書の中心には述べられていないが、都率往生あるいは都率浄土も本書成立のために重要な役割を担っていると考えられる。この点を考察してみよう。

『五輪九字秘釈』の中、所化機人差別門の所説に注目しよう。すなわち

問う。世間の真言行者並びに道心者の但念の者を見聞するに、いまだ必ずしも皆、浄土に往生せず。何なる用心を以て今度、往生の願を遂げん<sup>(2)</sup>

という。ここは順次往生の機根について述べられた内容である。世間には真言行者並びにひたすら念仏する仏道者がいるけれども、そのすべてが往生しているとは思えない。どのような用心が往生を遂げようと願う者にとって必要なのであろうか。このような質問である。これに対して往生の因縁をいくつかあげている。その中で

或は顯密の行業、自を執し他を非する者も順因にあらず。或は弥陀弥勒の行者互いには非をなす。是れ地獄の業因なり……

という。顯密の行と密教の行、自分の立場に固執し他を批難するのは往生の因縁とはならないとした後に、弥陀信仰の行者と弥勒信仰の行者のことをあげている。ここでの弥陀の行者とは極楽往生を願う行者であり、弥勒の行者とは都率往生を願う行者である。ここでは極楽往生を願う行者と都率往生を願う行者との争いが想定される。現実に極楽往生と都率往生との是非あるいは優劣を論ずることがあったと考えられる。そして興教大師はそのような論義は往生を願う行者にとって無意味であるという。興教大師はその無意味さを地獄の業因とまでいっている。さてこの都率を願うのが真言行者であったのなら、あるいは極楽往生を願うのが真言行者であったのなら、興教大師はなおさら二種の是非を問うことは許したくなかつたろうと思う。なぜなら都率往生の都率浄土も極楽往生の極楽浄土ともに真言教

理からみれば密厳浄土であるからである。その点を序文で「安養、都率は同仏の遊処」という。さらに古来よりの都率往生と極楽往生の是非あるいは優劣が「惜しいかな、古賢、難易を両土に諍うことを」という表現に序文ではなっていないと考える。

#### 四 都率往生と弘法大師

都率往生とは、命終の後に弥勒菩薩の浄土である都率天に往生することをいう。弥勒菩薩は釈尊の補処の菩薩として諸天のために都率天で説法し、五十六億余年後に閻浮提に下生し、龍華菩提樹下にて成仏し衆生に三度説法するとい<sup>(24)</sup>う。

さて都率往生は真言宗にとってどのような意義があるのだろうか。弘法大師が都率往生したとの記述があるので、真言宗にとって都率往生は重要なのである。

弘法大師が都率往生をしたかどうかはともかく、弘法大師の都率往生の記述は『御遺告』にある。弘法大師全集第二輯に六本の『御遺告』の中の二本、すなわち『太政官符並遺告』<sup>(25)</sup>『二十五条御遺告』<sup>(26)</sup>に都率往生の記述がある。『二十五条御遺告』の第十七条目の「後生の末世の弟子、祖師の恩を報進すべき縁起」では

祖師の吾が顔を見ずといえども、心あらん者は必ず吾が名号を聞きて恩徳の由を知れ。是れ吾れ白屍の上に更に人の労を欲するにあらず。密教の寿命を護り継ぎて龍華三庭を開かしむべき謀なり。吾れ閉眼の後には必ず方に兜藥他天に往生して弥勒慈尊の御前に侍すべし。五十六億余の後には必ず慈尊と御共に下生し、祇候して吾が先跡を問うべし。また且つはいまだ下らずの間は、微雲管より見て信否を察すべし。是の時に勤あらば祐を得ん。不信の者は不幸ならん。努力努力後に疎かにすることなかれ<sup>(26)</sup>

という。これは弘法大師が都率往生し、さらに弥勒菩薩とともに五十六億余年後に下生することを説いている。このことはおそらく『弥勒上生経』などを基にして説かれた事柄であろう。『御遺告』の弘法大師の都率往生の記事が、真言宗での都率往生の意味を問うのに重要であろう。しかしこの『御遺告』は弘法大師の真撰でないとする見方が強い。<sup>(27)</sup>

もし都率往生を含む『御遺告』が弘法大師の真撰でなければ、真言宗にとって都率往生は問題にされないであろうか。『御遺告』が弘法大師の著作として流布していれば、都率往生は真言宗にとって重要な事柄になろう。

興教大師在世の当時は果してどうだったのでしょうか。興教大師の生れる頃にはすでに活躍していた真言宗の学僧に濟暹(一〇二五—一一一五)がいる。濟暹に『弘法大師御入定勸決記』の著作がある。その中の項に「閉眼後都率天事」「弥勒出世時人量寿命等事」<sup>(28)</sup>などで『御遺告』の弘法大師都率往生の記事をもとに注釈を加えている。また濟暹は都率往生の重要性を説いたという。<sup>(29)</sup>であるからこの当時はすでに弘法大師の都率往生の内容を含む『御遺告』は広まっていたと考えられる。

興教大師の著作といわれているものに『弘法大師講式』がある。その中に『二十五条御遺告』の弘法大師の都率往生の内容の一部が引用されている。<sup>(30)</sup>『弘法大師講式』が興教大師の著作だとすれば、興教大師も当然、弘法大師都率往生の事を熟知していたといえよう。そして興教大師在世の頃には、都率往生を願う真言行者もいたことであろう。

#### まとめ

『五輪九字秘釈』における往生を考察して、興教大師の往生の理解を述べた。さらに本書に都率往生が果たした役割を言及した。

『五輪九字秘釈』は大日即弥陀、密嚴即極樂を説き、さらには興教大師の弥陀信仰を表明するといわれている。しかしそれのみでは本書を理解できないことを本稿では述べた。本書のもう一つの性格は往生（極樂往生のみではなく都率往生を含めた<sup>(31)</sup>すべての往生）思想を真言教理Ⅱ曼荼羅思想Ⅱ秘密釈で説き明かすことである。そこで本稿では本書成立の背景の一つには都率往生があることを指適した。都率往生は真言宗にとっても重要である。都率往生は弘法大師の往生した浄土である。これが興教大師が『五輪九字秘釈』成立せしむる背景の一つであると考えた。そこで興教大師の頃の真言宗における都率往生の意味を一層問う必要性を感じた。

また今後の課題となる気が付いた点を述べよう。一つは一密成仏の事である。『五輪九字秘釈』では一密成仏の用語が見られない。しかし本書に一密で成仏する意が説かれている。おそらく興教大師から一密成仏が説かれたのだと思う。その一密成仏とは往生を願う真言行者との関連で説かれたものと予想する。その点を明確にしなければならぬと思う。さらにもう一点、往生を願う真言行者を興教大師は認めたことである。このことよって起こる問題を検討しなければならぬ。その点も真言教理との問題になるが、それはたとえば死あるいは死後という視点を真言宗に与えたということが考えられる。

## 註

- (1) 『密教辞典』『覚鏡』の項
- (2) 平安時代の藤原文化の頃には末法思想と相まって浄土教が広く普及した（笠原一男氏著『詳説日本史研究』、一一八頁、山川出版、一九七七年三月）。また勝又俊教博士著『興教大師の教え』、十六頁（真言宗豊山派宗報四八二号別冊、平成元年九月）。
- (3) この点に関しては佐藤哲英氏著『叡山浄土教の研究』、四二五—四二六頁（昭和五十四年三月）参照。
- (4) 勝又博士前掲書、十六頁
- (5) 右同、十六—十七頁
- (6) 渡辺照宏博士の跋文（宮坂博士『興教大師撰述集上下』所収）
- (7) このような視点に大変な示唆を与えてくれたのが楢田良

- 洪博士の「興教大師と済邊教学」(『豊山学报』十四・十五合、昭和四十五年三月)である。
- (8) 大正蔵79卷の十一頁上段から中段の六行目まで。『興教大師全集』下、一一二―一二二頁。本稿では大正蔵本を利用した。
- (9) 扱法権実同趣門、正入秘密真言門、所獲功德無比門、所作自成密行門、纒修一行成多門、上品上生現証門、覚知魔事対治門、即身成仏真行門(即身成仏行異門)、所化機人差別門、發起問答決起門。
- (10) 那須政隆博士著『五輪九字秘密釈の研究』、四頁。
- (11) 『十住心論』にある(第三住心から第九住心の最後に説く)曼荼羅思想を基本とした考え方である。またそれは『大日経疏』(大正蔵39・七八八・下)に説かれている。
- (12) 『太政官符並遺告』『二十五条御遺告』(弘法大師全集第二輯、七七四頁、七九七―七九八頁)
- (13) 大正蔵本の註(大正蔵79、十一頁脚註)を参照。
- (14) 『五輪九字秘釈の研究』『興教大師撰述集』ではともに「西」としている。
- (15) 慈恩大師窺基の『観弥勒菩薩上兜率天経題序』(大正蔵43・二七七・上)、懐感の『群疑論』(大正蔵47・五十二・下)。源信の『往生要集』(大正蔵84・四十七・上)に都率と極楽との往生を問題にしている。
- (16) 『浄土宗大辞典』「往生」の項。
- (17) 『浄土宗大辞典』「往生」の項
- (18) 『仏教大辞典』「順次」の項
- (19) 大正蔵79・二十一・下
- (20) 大正蔵79・二十二・中
- (21) 宮坂博士前掲書の中の『五輪九字秘釈』の解題(上巻、四〇四頁)の取意。
- (22) 大正蔵79・二十二・上
- (23) 大正蔵79・二十二・上
- (24) このことは『弥勒上生経』(大正蔵14・四一八・中―四二〇・下)などに説く。また都率往生は唯識関係の祖師によって願生されていたという。
- (25) 弘法大師全集第二輯、七七四頁、
- (26) 右同 七九七―七九八頁
- (27) 上山春平氏著『空海』(昭和五十六年九月)、一三三―一三五頁
- (28) 弘法大師伝全集第一巻、九八頁、一〇三頁、一一九頁など。
- (29) 榎田博士前掲書
- (30) 興教大師全集下巻、一三二―一三〇頁
- (31) 興教大師以前には『日本往生極楽記』『大日本国法華経験記』がある。また興教大師の頃の高野山の往生を知るのに一一八七年頃に成立したと考えられる(日本思想大系『往生伝・法華験記』解説、七五八頁)『高野山往生伝』が

ある。真言行者の都率往生についてはよく検討していないのでわからないが、都率往生の伝記が『大日本国法華経験記』に散説している。また真言行者の極楽往生については『高野山往生伝』『日本往生極楽記』に見られる。